

こころのページ

この4月、中国の温家宝首相が来日した。東京で三首相との会談やエッセイ問題の討議が済むと、関西に移動し、嵐山観光を兼ねた。あと立命館大学を訪問した。この交流会には、西京極、野球場では同大学硬式野球部、ユニホーム姿でキャッチボールを楽しんだ。そのとき、北東五輪の帽子を野球部に譲りした。

温家宝首相が立命館(定)留學運んだのは中国からの留學生、あるいは研修を受けた中国の大学幹部、大学教員だ。いということだけではなかつた。というのも、日本では孔子学院が設立されたところでもあるからだ。

中国文

化の普及をかけた、中国政府が推進するところの国際的な文教政策である。2004年に韓国やウズベキスタンにきたのを始め、いまでは50か国、40か所を超える、開設ラッシュが続いている。日本でもすでに早稲田大学など7か所に及び、孔子の名を冠しているところはドイツのゲーテ・インスティトゥート(ドイツ文化センター)とよく似ているが、こちらは大学などと提携している点にある。

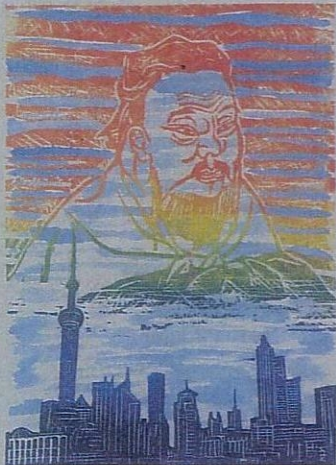
孔子の名前がついた施設といえは孔子廟が想起される。日本にも湯島聖堂(東京)、開台学校(岡山県)、多久聖廟(佐賀県)など儒学の学問所のために設置されたものがある。他方、至聖廟(那覇)

カミ・ホトケはどこへ① 中牧 弘 允

や長崎孔子廟のよつに中国人の心よりどころとして建設されたものもある。

儒教はいかにも宗教のようには学問であり、「孔子」といえは哲人・聖人のイメージがつよい。江戸時代には武家の倫理・教養として意味をもち、明治以降は国民文化の精神的支柱のひとつとして機能した。ところが戦後、『論語』はせいせい漢文の授業でとりあげられるにとどまり、大衆文化の興隆とは裏腹に思想的潮

中国発展と共鳴し復活



版画・田主誠

孔子

流から取り残されがちであった。儒教儀礼のほうも、もとも日本では定着せず、もっぱら思想や修身として受容されてきた。

しかし、このところ儒教に一種の再生のきざしがみえる。一例をあげれば、漢學者、とりわけ陽明学者として高名な安岡正篤の著作がブックフェアの対象となったりしている。そこでは熾烈な競争社会

を乗り切る心構え——たとえは「胆識」が説かれる。胆識とは「見識に決断力・実行力を伴ったもの」と説明され、「一人の長となるほど、必要なもの」と推奨される。

アメリカでも儒教的ヒューマニズムの研究で知られハーバード大学燕京研究所の所長をつとめる杜維明教授が文明間対話に積極的にかかわっている。かれは一昨年東京で開催された国際宗教学宗教史会議で「公的知識人」としての宗教指導者について論じた。そのようなりダーはみずからの信仰共同体の言語と、世界市民の言語を駆使して、「多様性の中の統一」——画一性なき調和をめざすべきである。

孔子は古くは秦の始皇帝による焚書坑儒の憂き目にあい、新しくは文化大革命のときに批判された。しかし、現在の中国政府を再評価し四書五経に価値を認めようとして新たなそれは文化としての儒教である。中国語教育の旗印としての孔子である。孔子は経済的発展を遂げる現代中国のソフトでもあり、北京五輪博を成功にみちびく文化英雄にもみえる。中国における孔子の復活は経済復興と不即不離の文化的現象のようにおもわれる。

(国立民族学博物館教授・宗教人類学)

こころのページ

